

# 死を前にした人, Gawain

貝塚 泰幸

## 1

*Sir Gawain and the Green Knight* (以下 *SGGK*) については多様な解釈が提示されてきているものの、奥方の誘惑によって Gawain が緑の腰帯を受け取り、Bertilak に返さなかったことが緑の騎士による緑の礼拝堂での一撃に繋がるため、「誘惑の場面」が作品の中心であるという点においては意見が一致している<sup>(1)</sup>。それにもかかわらず「誘惑の場面」のみに焦点を当てた研究は意外に少なく<sup>(2)</sup>、その解釈の幅も決して広くはない。たとえば Gawain と奥方とのやりとりの間に喜劇性を認める解釈がある一方で<sup>(3)</sup>、宗教的な意義を見いだそうとする解釈もある<sup>(4)</sup>。騎士としての美德が試されているのだと主張する研究者もいれば<sup>(5)</sup>、古フランス語ロマンスの伝統を継承した典型であると主張する研究者もいる<sup>(6)</sup>。

しかしながら、これらの先行研究は、作品が成立した当時の時代背景や繰り返し強調される「死」というテーマを正當に評価しているとは言い難い。周知の通り、中世後期ヨーロッパにおいては環境の変化に伴う飢饉や度重なる戦争、疫病の蔓延がそこに生きる人々にとってそれまで以上に死を身近なものにしてしまった。このような社会では突然訪れる死に備えることは当然であり、*Ars moriendi* (以下 *AM*) として知られる読物が誕生したことは時代の要請と言える。そして *SGGK* に描かれる「死の恐怖」もまた時機を得たテーマである。一方は実用書として、もう一方は文学作品として当時の世相を反映するこれら2つの作品はともに「死」という主題を扱っている。さらに両者は「死を前にした者の受ける誘惑」が描かれているという点でも共通している。本論では *SGGK* の「誘惑の場面」と *AM* の悪魔の誘惑の共通点を検証することで、両者の誘惑が同一のものであることを論証したい。初めに、二つの誘惑の関連性をより際立たせるために *AM* とそれに関する先行研究について概観する。

## 2

*AM* は死を迎えるにあたり心構えを説く指南書である。ラテン語で書かれたこの指南書

(1) Christopher Dean (1971), p. 1.

(2) Ibid., p. 1.

(3) J.A. Burrow (1965), pp. 71-7; David Mills (1968), pp. 612-21 参照。特に Burrow の「誘惑の場面」のある第3部の描写が「ロマンスのそれよりはむしろファブリオーのそれに近い」(p. 75) と評した議論が後の研究に与えた影響は計り知れない。

(4) Bernard S. Levy (1965), pp. 93-8; Donald R. Howard (1966), pp. 230-6; V.J. Scattergood (1981), p. 354 参照。

(5) Larry D. Benson (1965), p. 44; W.R. J. Barron (1980), pp. 48-9 参照。

(6) Ad Putter (1995), pp. 100-48.

の成立は15世紀初頭とされており<sup>(7)</sup>, *Tractatus, or Speculum artis bene moriendi*と*Ars moriendi*の名で知られる挿絵のついた縮約版とがある<sup>(8)</sup>。15世紀後半になると、活版印刷術の恩恵を受けてヨーロッパ中で出版されている<sup>(9)</sup>。イングランドにおいてはラテン語原典からの翻訳*The Boke of the Craft of Dying*の収録された複数の写本が現存しているほかに<sup>(10)</sup>, 1490年以降William Caxton, Richard Pynson, Wynkyn de Wordeらによって印刷、出版が繰り返されている。特にWordeが出版した2つの版(1497年版・1506年版)は、それぞれ木版画による2つの挿絵によって視覚的にも読者に訴えている。1497年版には、13世紀から続く主題“Three Living and Three Dead”をモチーフにした挿絵があり、十字架を挟んで美しく着飾った馬上の3人の男たちが3体の骸骨と対峙している。男たちは狩猟の最中のように、犬と鷹を伴っている。右隅には翁が腰を下ろして左手に大きな本を抱えたまま、3人の生者と死者の出会いに私たちの注意を向けるように右手を伸ばしている。もう1枚の挿絵にはイエスの磔刑の様子が描かれている。槍で腹を突かれたイエスが中央に描かれ、まわりをローマの兵士が取り囲んでいる。左隅ではマリアが泣き崩れている。1枚目の挿絵は1506年版にも収録されているが、2枚目の挿絵は1497年版とは異なり、磔にされたイエスは背景に置かれ、死を迎える男が中央に描かれている。男の寝台は5頭の怪物に取り囲まれているものの、聖職者と思われる人物が傍らで言葉をかけている。この挿絵は悪魔による5つの誘惑と死を迎える人との問答を視覚化したものに違いない。

6章からなる「死の手引書」は善き死と死を迎える術を読者に奨めることから始まる。第2章では悪魔による5つの誘惑が詳細に説明され、対処法についても紹介されている。第3章は死を前にした人々が受ける質問、いわゆる“Anselm Questions”<sup>(11)</sup>についてである。すべての質問は「はい」もしくは「いいえ」で答えることができ、その形式は連祷“litany”に類似している。たとえば“art þou glad þat þou schalt dey in [þe] ferth of Crist?” (pp. 412-13) という質問から始まり、“Knowest þou well þat þou hast not do so well as þou schuldist haue do?” (p.413), “Repentis þou þe þerof?” (p. 413) などと複数の質問が矢継ぎ早に投げかけられ、臨終を迎えようとする人はすべての質問に対して常に「はい」と答えるように指導される。そして最後の質問で改めて信仰の重要性を理解しているかを問われる。“Belevist þou fully þat Crist dyed for the & þat þou maist neuer be sauved but by the merite of Cristis passion, and þankist þerof god with þin hert as much as þou canst or maist?” (p. 414) 当然のことながら、信仰の重要性が繰り返し強調されている。注意すべきは、これらのやりとりが決して「赦しの秘跡」ではないという点にある。次の章は、十字架の上でのイエスの姿に擬えて死を迎える人がすべき5つの言行と捧げるべき祈りについて教授している。この手引書を締めくくる最後の2つの章は、死を迎える人の傍らにい

(7) Mary Catherine O'Conner (1942) はこの手引書がConstance 公会議 (1414-18) において成立したと考えている (p. 54)。Nancy Lee Beaty (1970) もこの点については同意している (p. 2)。

(8) Beaty, p. 2.

(9) 木間瀬精三 (1974) はこの手引書を「15世紀初頭のベストセラー」と評して、多くの人々に読まれた一因を印刷術の発明と時間的に合致したことに求めている (p. 39)。

(10) *Yorkshire Writers* (1896), pp. 406-420. AMからの引用は以降この版による。

(11) これは質問の前半部分がAnselm of Canterburyの著作に拠っているためである。また後半部分については、その典拠をドミニコ会修道士Jean Gersonの著作に求められる(Beaty, pp. 18-22; Donald F. Duclow (1999), p. 384)。

る人々の心構えや義務について論じている。第5章では死を迎える人の信仰心を揺るぎないものにすること、敬虔な物語を語り聴かせ祈りを捧げること、さらに臨終を迎える人が陥ろうとしている危険について知らせることなどが推奨されている。最終章で著者は、死を迎える人が聖職に就いている場合と世俗の者である場合とで対応の違いがあることを指摘している。特に死を迎える世俗の人々のためには定型の祈りが用意されている。さらに、この章の冒頭には興味深い一節がある。

But alas þer ben full few not only amonge seculers but also in dyuerse religiose, þat haue þe kunnyng of þis craft & will be nygh and assist to hem þat ben in poynt of dethe … namely whan þai þat ben in dyinge wolden not or hopyn not to dye yet, & [so] þe seke mennys soules stonden in gret perell. (p. 418)

この手引書の著者は世俗の者だけでなく聖職者もまたこういった儀式に関する知識がないことを嘆いている。冒頭でも述べたように、この手引書は15世紀に書かれたものであり<sup>(12)</sup>、14世紀に書かれた *SGGK* との関連を議論しようとすれば時間的な齟齬が生じてしまう。しかし著者の表明した落胆—あるいは不満—は、*AM*が成立する以前からすでに死を迎える人々のための確立された儀式や慣習が存在していた可能性を暗示している。上に引用した “þer ben full few” という表現は裏を返せば、この手引書に記された知識を有し指導すべき立場の人々がいたことを示唆している。

本論において重要となる主題は第2章で扱われる悪魔の誘惑である。Mary Catherine O’Conner (1942) は、悪魔の誘惑について書かれた第2章が中世の人々にとって “high spot” であると考えられていたと断言している<sup>(13)</sup>。また、Nancy Lee Beaty (1970) は “the heart of the treatise” と評して、他の章にくらべてほぼ2倍の分量が誘惑に関する記述に費やされていることを指摘している<sup>(14)</sup>。さらに、R.N. Swanson (1995) は14世紀から15世紀の人々の心情と関連させながら、*AM*における誘惑は当時の人々が死を恐れていたことを示す証拠であると論じている<sup>(15)</sup>。とりわけ、Eamon Duffy (2005) の誘惑の場面に関する考察は注目に値する。Duffy は木版画の挿絵のついた *AM* を例にあげ、死の床を “the centre of an epic struggle for the soul of the Christian”<sup>(16)</sup> と評している。死を迎える人が横たわる寝台こそが臨終のときを迎える人に降りかかる誘惑という事態の中心なのである。

### 3

*SGGK* と15世紀に流布した死の手引書との関連は Takami Matsuda (2007) によってすでに指摘されている。しかし、Matsuda の論考は両者を関連させた最初の研究ではない。

(12) Beaty はいわゆる ‘ars moriendi’ という文学伝統が15世紀以前には存在しないと分析している (p. 1)。

(13) O’Conner, p. 27.

(14) Beaty, p. 5.

(15) Swanson, p. 225.

(16) Duffy, p. 317.

Gerald Morgan (1985) もまた Burrow (1959) が無効であると判断した Gawain の「赦しの秘跡」の有効性<sup>(17)</sup>を議論する際に *AM* に言及している。ただし Morgan の議論は臨終を迎える人にとっていかに「赦しの秘跡」——とりわけ「痛悔」——が重要であるかを論証するものであり、*SGGK* と死の手引書との直接的な関係を主張するものではない<sup>(18)</sup>。したがって、*SGGK* と *AM* の類似性に初めて言及した Matsuda の主張は、これまでになく誘惑の場面に関する解釈の可能性を示した点において画期的である。しかし Matsuda の議論の本質は *SGGK* と *St Patrick's Purgatory* の関係にあるため、*SGGK* と *AM* の誘惑の詳細な分析が欠けているなどその二次的性格は否めない。それゆえ 2 つの作品の関連性をより深く議論することが求められる。

Matsuda は *SGGK* の「誘惑の場面」が *AM* におけるそれと似通っていると主張して、両者の共通点について次のように述べている。

Not only the repeated temptations by the lady at Gawain's bedside resemble the structure of the *ars moriendi* and the standard iconography of its woodcut illustrations, but Gawain going to confession immediately after a series of temptations is also parallel to the sequence of the *ars moriendi* that moves from temptations to as a set of interrogations. (p. 503)

「寝室のベッドの上で誘惑を受ける」という *AM* における誘惑——木版画に描かれる死の床にふせる者を取り囲む悪魔の誘惑——は Gawain が寝室のベッドの上でうける誘惑と確かに類似している。Matsuda はさらに Gawain が奥方の誘惑をうけたすぐ後に「赦しの秘跡」を受けに行くという構成もまた、*AM* において「誘惑」に関する章から「死を迎える者との問答」に関する章への移行という手引書の構成に対応していると指摘している。しかしこの点に関しては議論の余地がある。Morgan によれば “Anselm Questions” の 1 つは「赦しの秘跡」の準備としての質問である<sup>(19)</sup>。一見すれば確かに「赦しの秘跡」を想起させる内容ではあるものの、それが第 3 章全体の主旨でないことを忘れてはならない。さらに聖職者の質問に対して床に伏せる者が答えるという形式からも分かるように、“Anselm Questions” において死を前にした人は受動的である。それに対して、Gawain は積極的に罪を告白して赦しを請うている。とりわけ “Anselm Questions” が決して「赦しの秘跡」ではないという事実が、*SGGK* における Gawain の行動との相違を決定的なものにしている<sup>(20)</sup>。したがって、Matsuda が指摘する *SGGK* の誘惑と *AM* の誘惑が共有する 2 つの特徴のうち、「誘惑」から「問答」へと移行する構造上の類似性を両者の間に見いだすことはできない。

それでもなお、Gawain が受ける誘惑は死を前にした人がうける誘惑に他ならない。緑の騎士との約束を果たそうとする Gawain の運命は絶対的な死以外にはありえない。まさ

(17) P.J.C. Field (1971) も Gawain の聴罪司祭への「赦しの秘跡」は有効であると見なすべきだと主張している (pp. 260-1)。

(18) Morgan, p. 2 参照。

(19) Morgan, p. 13.

(20) 中世における「赦しの秘跡」については John Myrc による *Instructions for Parish Priests* (1868) の記述が参考になろう (ll. 787-1810)。

に「死を前にした人, Gawain」なのである。Duffy の *AM* における誘惑に関する考察が示すように、死の床こそがキリスト教徒が魂の救いを求める跪きの中心であり、死を前にした Gawain にとってもまたベッドの上こそ最大の試練が待ち受ける場所なのである。このことは緑の礼拝堂で緑の騎士から明かされる一連の出来事の真相、すなわち Gawain をもてなした城の主人が奥方を Gawain の元へと送り、彼を試そうとしたという事実からも明白である。そして何より、悪魔の誘惑に関する第2章が *AM* の中心であるように、*SGGK* にとっても「誘惑の場面」こそ物語の中心なのである。では、*SGGK* と *AM* と共通するものは、*AM* の構造と木版画の挿絵に見られる図像だけであろうか。

「誘惑の場面」に限らず *SGGK* そのものが古フランス語ロマンスの伝統を色濃く反映している<sup>(21)</sup>。しかし少なくとも「誘惑の場面」に関していえばそのロマンスの伝統は皮相的であり、登場人物の心理描写や語り手の台詞を使って詩人はそれまでとは異なる誘惑の場面であることを示そうとしている。そのもっとも顕著な例が、初めて Gawain の寝室を訪れた奥方の心理描写だろう。

“Þaz I were burde brygtest,” þe burde in mynde hade,  
 “Þe lasse luf in his lode for lur þat he soȝt, || bouthe hone;  
 Þe dunte þat schulde hym deue,  
 & nedeȝ hit most be done;” (ll. 1283-7)<sup>(22)</sup>

これまでの校訂者は、1284 行目 “lur” について “loss, disaster, sorrow” といった曖昧な語彙を当ててきた。これに対して、*Middle English Dictionary* (以下 *MED*) は “destruction, death” という<sup>(23)</sup>、より明確に主人公の死を意識させる意味を与えている。この日より3日後には Gawain の首もまた緑の騎士によって切り落とされる。彼の死は火を見るより明らかであり、*MED* の解釈はより自然である。Ad Putter (1995) はこの描写について Chrétien de Troyes の *Le Chevalier de la charrette* において Lancelot を誘惑した城の女主人の独白と比較して、 “[t]he gist of their monologues is the same”<sup>(24)</sup> としている。確かに Lancelot は Guenevere を救出するために自分の身を死の危険に晒しているが、Gawain のように絶対的な死が待ち受けているわけでもなければ、王妃を救出するために命を落とすことを覚悟しているわけでもない。両者の類似性は認められるが発言の主旨は決定的に異なっている。この奥方の心理描写の意義は、「死を避けることはできない」という思いに Gawain が囚われていることを、奥方の心の声を通して示唆していることである。

(21) Putter (1995), p. 244 参照。

(22) この一節は Sir Frederic Madden (1839) の校訂本より引用した。この独白については多様な校訂が施され、さまざまな解釈が提唱されている。緑の礼拝堂を求める理由や緑の騎士との首切りの取り決めに関して奥方が聞き及んでいるという事実が「物語の展開上決定的な矛盾となる」(p. 110) という Norman Davis (1967) の指摘から、その理由の一端を推し量ることができよう。しかし、George Sanderlin (1973) が提唱する写本に書かれたままの読みに矛盾はない。なぜなら、緑の騎士との対峙が何を意味するのか、案内役の従者が知るような緑の騎士に関する噂や Gawain が緑の騎士と対峙するという事実を、城の主人の妻が知らないはずがないからである。Putter (1996), pp. 79-82 参照。

(23) *MED*, sv. “lire,” *n.*<sup>1</sup> 3. (a).

(24) Putter, (1995), p. 125.

ロマンスにおける誘惑との本質的な違いを示唆する描写は他にもある。2日目の「誘惑の場面」の最後、Gawainと奥方のやりとりについて語り手は次のように述べている。

Pus hym frayned þat fre and fondet hym ofte,  
For to haf wonnen hym to woze, what so scho þoȝt ellez; (ll. 1549-50) <sup>(25)</sup>

Putterは1549行目“frayned… and fondet”を同義的に使用されていると指摘し<sup>(26)</sup>、Malcolm Andrew and Ronald Waldron (2007)も散文訳のなかで同様の解釈を示している。これに対してMEDは、2つの動詞の意味を明確に区別している。動詞“frayned”には“ask, request”などという意味があり<sup>(27)</sup>、動詞“fondet”は“put to the test, tempt”などの意味を持つ<sup>(28)</sup>。どちらも古英語以来意味の変化はない。このように等位接続詞によって2語以上が連結される修辞法は“repetitive word pairs”と呼ばれ、意味的に似た動詞を重ねることでその意味を強調する用法や意味の反する2つの語を用いて全体の意味をあらわすといった用法がある<sup>(29)</sup>。ここで用いられた表現は意味の異なる語を列挙するもので、こういった列挙型の修辞法のなかには2つ以上の動詞があらわす動作の時間的な関係を示す用例もある。事実*Pearl* 149行目には列挙型の“stote and stare”が用いられている。この前後には主人公が夢のなかで異界に降り立った様子が描かれ、それまで詳述された主人公の行動をわずかに二語で総括し「立ち止まる」という行為と「見る」という行為を時間的な前後関係から並置している。*SGGK*においては“frayned… and fondet”と動詞を重ねることによって、最初に奥方が「求め」そして次に「試し」たことを改めて描写し、それまでに起きた出来事をわずかに2つの動詞によって時間の経過に従って総括している<sup>(30)</sup>。「求める」だけでは、誘惑する側の欲求を満たすことを意味し、奥方の誘惑がロマンスで描かれるような典型だと見なすことができる。しかし、「試す」こともまた奥方の誘惑の特徴である。その背後に隠された動機があることは明らかである。

さらに重要な点が1550行目“to haf wonnen hym to woze”に関する解釈である。長く*SGGK*の校訂本の決定版としての地位を占めているNorman Davis (1967)版は“woze”を動詞“woo”と解釈している一方で、Andrew and Waldronをはじめとした多くの校訂本はこれを名詞“wrong, harm, sin”などと解釈している。また、MEDは名詞“wough”を“opposition to God’s will, sin”と定義している<sup>(31)</sup>。Davisの解釈にしたがえば、一連の描写は単なる誘惑にすぎない。しかし、Andrew and Waldronの解釈にしたがえば、一連の描写はロマンスに見られるような誘惑ではないことが見えてくる。奥方の真の意図がどのようなものであったにせよ、その目的はGawainに罪を犯させることである。語り手が意図

(25) 一節はMalcolm Andrew and Ronald Waldron (2007)の校訂本より引用した。以下本作品の引用はすべてこの版によるものとする。

(26) Putter (1995), p. 104.

(27) MED, sv. “frainen,” v.

(28) MED, sv. “fönden,” v. 1. また2つ目の語義として“To subject (a person) to trial by tempting him with sin; to tempt to evil.”という意味を与えられている。

(29) Inna Koskeniemi (1968), pp.11-12, 90-6 参照。

(30) Dean, p. 7 参照。

(31) MED, sv. “wough,” n<sup>2</sup>. 2. (a).

的にGawainと奥方のやりとりに対してこのような解説を加えていることは間違いない。そこには「罪を犯させようとして」という内容が書かれているのであるから、奥方の誘惑をロマンスにおいて騎士が受ける誘惑と同一視することはできない。この誘惑はむしろ *The Quest of the Holy Grail* において描かれる Perceval の誘惑の場面<sup>(32)</sup> に類似しているように思える。

そしてGawainにとって致命的となる誘惑が緑の腰帯に関するやりとりである<sup>(33)</sup>。3日目、奥方はそれまでと同様にGawainと男女の関係になることができず、それ以上の進展をあきらめた。そのかわり奥方は緑の腰帯を贈ることを提案する。頑なに拒み続けるGawainに、奥方は身につけた者は決して傷を負わないというその腰帯の不思議な力について語る。死を前にしたGawainにとってはこの上もない提案である。死が翌日に迫るとき、このような不思議な力のある腰帯を手に入れることができるとわかった者なら誰でも、Gawainのそれまでの苦悩や恐怖だけでなく突如として訪れた一縷の希望をも共有するに違いない。

Hit were a juel for þe jopardé þat hym jugged were:  
When he acheued to þe chapel his chek for to fech,  
Myzt he haf slypped to be vnslayn þe slezt were noble. (ll. 1856-58)

まるでそれまでの誘惑が腰帯を受け取らせるためだけに描かれてきたかのよう<sup>(34)</sup>に、Gawainに内在していた「死の恐怖」はここで頂点に達し、「生への渴望」が呼び覚まされる<sup>(35)</sup>。そしてこの「生への執着」こそ、AMにおいて5つ目の「世俗の人々を罪へと駆り立て、もっとも苦しめる誘惑」<sup>(36)</sup>がその標的としている人間の感情なのである。

Gawainは藁にもすがる思いで緑の腰帯を受け取った。おそらく、腰帯を身につければ死を免れるという奥方の話を完全には信じてはいなかった。緑の礼拝堂で緑の騎士から斧の一撃を受けようとしたときGawainは“schranke a lytel with þe schulderes” (l. 2267) している。Gawainは腰帯をうけとることも自分のもとに留めておくことも罪になるとは考えていなかったのかもしれない。奥方が帰ったあとすぐに「赦しの秘跡」を受けたのは、詩人が明示しているように、「翌日自分は死ぬ」という思いからである。しかしGawainは生き延びた。緑の騎士はGawainの首にわずかな擦り傷を負わせるだけで赦した。そして緑の騎士はGawainには“lewté” (l. 2366) が欠けていたから傷を負うことになったのだと告げる。これに対してGawainは自分の過ちを次のように分析している。

For care of þy knokke, cowardyse me tazt  
To acorde me with couetyse, my kynde to forsake:  
Pat is larges and lewté, þat longez to knyztez....’ (ll. 2379-81)

(32) *The Quest of the Holy Grail* (1969), pp. 124-9.

(33) Burrow, p. 96; Dean, p. 5.

(34) Dean, p. 5; Stephen Manning (1964; rpt. 1968), p. 288.

(35) Dean, p. 5; Morgan, p. 8 参照。

(36) *Yorkshire Writer*, p. 412.

Gawainによれば, “cowarddyse”が “couetyse”に従うよう唆したために “lewte”を放棄してしまった。Valerie Allen (1992)はGawainが犯した罪を “cowarddyse”だと考えているが<sup>(37)</sup>, Gawainの自己分析からも分かるように, “cowarddyse”はきっかけに過ぎない。直接の原因は, “couetyse”である。そしてAMが詳細する5つ目の誘惑は, この世のもの—たとえば自分の妻や子供, 友人, 財産など—への執着「貪欲」“avarice”<sup>(38)</sup>に関する誘惑である。*The Parson's Tale*によれば, 「生への執着」という感情やそれに基づく行動はこの「貪欲」という罪ではない<sup>(39)</sup>。それにもかかわらず, Philippe Ariès (1981)はこの5番目の誘惑の対象である “avarita”が示す意味のなかには「生への執着」も含まれていると主張している<sup>(40)</sup>。またDavid Farley Hills (1963)は “avarita”という語が経済的な富に対する欲だけでなく, それ以外のものへの欲望を意味する神学的解釈が長く存在していたことを示して, アウグスティヌスの神学的立場からすれば「神以上に自らを愛することも “cupiditas”という罪である」<sup>(41)</sup>と指摘している。特筆すべきはAMもまた “seld it is seyne þat any seculer & carnall man or relygiouse man [other] dispose hym-selfe to deth…hopynge þat he schall escape þe deth—& þat is [þe] most perlous þinge & most inconuenient þat may be in eny cristen man” (p. 412)と説明している点である<sup>(42)</sup>。ではなぜ死から逃れようとするのであろうか。確かに後に残される家族や財産は原因となろう。しかし, 誘惑を受ける者たちを死からの逃避へと突き動かす一番の原動力は, 「生きたい」と願う強い気持ちに他ならない。*SGGK*における誘惑の場面では, 主人公の死に対する恐怖が至る所で顕在化している<sup>(43)</sup>。そして死を恐れるGawainに絶対的な運命から逃れる手段を与えると—もっとも効果的かつ合理的な方法によって「生への執着」という感情を呼び覚まし, 奥方の誘惑を成功に導いている。Gawainは死を前にしてどのような覚悟でいなければならなかったのか。その答えを手引書は教えてくれている。

“[W]e ought to take oure deth whan god will wilfully & gladly without any gruchchyng or contradiccion, … þouze þe lewd sensualite & the freelte of oure flessch naturally gruch or stryue þere-azence;” (408)<sup>(44)</sup>

死に対して抗おうとする態度が自然であることを認めながらも, 神の意志に従い死を受

(37) Allen, p. 190.

(38) St. Thomas Aquinas, *The Summa Theologica* (1998) (以下ST), I. ii. q. 84. art. 1.

(39) ll. 739-45. *The Parson's Tale*からの引用はすべてLarry D. Bensonの校訂本によるものとする。

(40) Ariès, p. 130.

(41) Hills, p. 129. Saint Augustine, Book XIV, Chapter 28; ST, I. ii. q. 77, art. 4参照。

(42) AM 第5章の冒頭にも類似した内容が書かれている (pp. 415-6)。

(43) *SGGK*においては「死」や「死の恐怖」を「誘惑の場面」以外でも強調されている。Judith S. Neaman (1976)は*SGGK*を特徴づけるキリスト教の祝日—「主の割礼祭 (1月1日)」と「死者の日 (11月2日)」—に注目して, その日に唱えられるミサが「死」や「悔悛」, 「聖母マリアのとりつぎ」を強調するもので, 14世紀当時の読者には身近なものであったろうと主張している (p. 33)。

(44) 「神の意思に従い, 死を受け入れるべきだ」という趣旨の記述はAMのなかで繰り返されている。 “[H]e schuld take his deth & suffer it patiently, conformynge & committynge fully his wyll vnto goddis will…” (p. 407); “he shuld dye wilfully, conformynge fully þerin his owen will to god[dis will] as he is bounde.” (p. 414)



け入れるべきだと主張している<sup>(45)</sup>。繰り返し強調されるこの内容は死を迎える者にとっての心構えである。生への執着は人間の本能であるとはいえ、それでも神の意志のままに死を受け入れなければならない。死を前にした Gawain もまたそのような心構えであるべきだった<sup>(46)</sup>。この点にこそ、Gawain の過ちを求めることができるのではないだろうか<sup>(47)</sup>。

#### 4

最後に、魂の救済を求める人々にとって必要不可欠な資質について考察したい。AMは死を迎える人々に信仰と悔悛の重要性を説いている。信仰の重要性についてはいうまでもない。一方で「悔い改め」や「痛悔」「repentaunce & contricion」が殊更に強調されている点については考察する必要がある。The Parson's Tale の冒頭では、「悔悛」「penitence」について述べられている。悔悛とは何か、何が悔悛へと導くのか、どのように悔悛すべきなのか、そして最後に悔悛が靈魂にもたらす利益についての説明が続く。悔悛とはAMにおいて強調されるばかりでなく、Geoffrey Chaucer によっても The Canterbury Tales の最後を飾る物語の主題として選ばれるほどに、中世において重要なテーマの1つであった<sup>(48)</sup>。そしてこの悔悛という主題もまたSGGKにおいて重要な位置を占めていることは疑いようがない<sup>(49)</sup>。

緑の礼拝堂において緑の騎士から一連の出来事の真相が明かされると、Gawain は恥辱に打ち震え自分の罪を告白する。Gawain があまりにも自らを責めるためになだめようと Bertilak は気遣うほどである。それでも Gawain の気持ちは収まらない。緑の騎士は再び城で共に過ごすことを提案するが、Gawain は城へ行くことを断る一方で腰帯を受け取ることは同意をする。その理由を Gawain は次のように述べている。

Bot in syngne of my surfet I schal se hit ofte,  
When I ride in renoun remorde to myseluen  
Pe faut and þe fayntyse of þe flesche crabbed,  
How tender hit is to entyse teches of fylþe.  
And þus, quen pryde schal me pryk for prowes of armes,  
Pe loke to þis luf-lace schal leþe my hert. (ll. 2433-38)

緑の騎士との約束を果たしたあとに描かれる Gawain の姿は、教区司祭が “contricioun is the verray sorwe … .And this sorwe shal been in this manere, as weyth Seint Bernard: ‘It shal been hevvy, and grievous, and ful sharp and pounaunt in herte” (ll. 129-130) と語るように、真の意味で悔悛した者の姿そのものである。さらに Camelot に帰還した Gawain は、

(45) ST, II. ii. q. 125, art. 4. 参照。

(46) Allen, p. 186; Matsuda, p. 503 参照。

(47) ST, II. ii. q. 125, art. 3. 参照。

(48) Robert W. Ackerman (1958), pp. 257-63; Leonard E. Boyle, O.P. (1985), p. 31 参照。

(49) Andrea Hopkins (1990), p. 205 参照。しかし、彼女が研究のなかで取り上げられた中英語ロマンス群と本作品とは、違いがあることも指摘している (p. 209)。

その命が尽きるまで「犯した罪の証」として腰帯を身に着け続けることを宣言する。これは悔悛することが一時的なものではなく、恒久的なものではなくてはならないという教区司祭の解説に一致している<sup>(50)</sup>。「首切りゲーム」の取り決めにしたがい緑の騎士から返しの一撃を受けた瞬間を Gawain にとっての「死」と捉えるならば、Gawain のこの強烈な自責の念と後悔は死後に訪れたことになる。しかし緑の礼拝堂で死は彼に訪れなかった。Gawain は死を前にして *AM* が死後の救済に不可欠であると繰り返し強調する「悔い改め」と「痛悔」という資質を備えたのである。

## 5

*SGGK*における誘惑の場面は、古フランス語ロマンスに見られる文学伝統の枠組みを借りながら、その深層には宗教的な主題が存在している。詩人は登場人物や語り手の言葉の端々に主人公の差し迫った死に対する恐怖に囚われる姿を織り込むことで、ロマンスの伝統では描かれ得ない誘惑の場面を創り上げた。Chrétien の作品に登場するような妖艶な女性が騎士のもとを訪れ愛の語らいを求める。2人のやりとりには、どこか滑稽な雰囲気を読み取ることができるかもしれない。しかし、それらは物語の中心で起きている出来事の表層でしかない。死を目前にした騎士が横たわる寝台の上で繰り広げられる奥方との戦いは物語の中心を担い、*AM* が最大の試練としている「生への執着」を喚起する誘惑によって Gawain はその人間的な弱さを露呈し過ちを犯すこととなる。奥方の誘惑によって主人公の「生への執着」は見事に呼び覚まされた。これらの事実は *SGGK* と *AM* における誘惑の類似性を示唆するだけには留まらない。*SGGK*における奥方の誘惑、とりわけ Gawain に緑の腰帯を受け取らせた3日目の誘惑は、死の手引書が詳細に説明している死を前にした人々が受ける5つ目の悪魔の誘惑そのものである。さらにこれら2つの作品の比較から見えてくるものは、両者の誘惑の同一性だけではない。真相を知った Gawain が自らの行動を深く悔いている様子は、詩人が悔悛という主題を殊更に強調していることを如実に物語っている。同様に手引書の作者もまた「悔い改め」と「痛悔」が欠くべからざる要素であることを繰り返し主張している。悔悛の重要性という両者を貫く共通の主題は、*Gawain* 詩人と死を前にした人々の心構えを説いた *AM* の作者とが互いに同じ死生観を共有していることを示しているに違いない。

## 謝辞

本稿の執筆にあたり、武内信一教授、石橋純二氏から戴いた的確かつ建設的な助言が大変参考になった。ここに記して感謝の意を表する。

---

(50) l. 305; Hills, p. 130; Morgan, p. 17; *ST*, III, q. 84; art. 8; *Sir Gowther* (ll. 697-708) 参照。

## 参考文献

### 一次資料：

- Aquinas, Thomas. *The Summa Theologica*. Trans. Fathers of the English Dominican Province. 1998. St Thomas Aquinas' Works in English <<http://www.dhspriory.org/thomas/>> Web. 23 Aug. 2013.
- St Augustine. *Concerning the City of God against the Pagans*. Trans. Henry Bettenson. London: Penguin, 1972. Print.
- Chaucer, Geoffrey. *The Riverside Chaucer*. Gen. Ed. Larry D. Benson. Oxford: Oxford UP, 1988. Print.
- Myrc, John. *Instructions for Parish Priests*. Ed. Edward Peacock. EETS OS. 31. London: Kegan Paul, 1868. Print.
- The Poems of the Pearl Manuscript: Pearl, Cleanness, Patience, Sir Gawain and the Green Knight*. 5th ed. Eds. Malcolm Andrew and Ronald Waldron. Exeter: U of Exeter P, 2007. Print.
- Sir Gawain and the Green Knight*. 2nd ed. Eds. J.R.R. Tolkien and E.V. Gordon. Rev. Norman Davis. Oxford: Oxford UP, 1967. Print.
- Sir Gawayne, A Collection of Ancient Romance Poems: By Scottish and English Authors, Relating to that Celebrated Knight of the Round Table*. Ed. Sir Frederic Madden. London: Richard and John E. Taylor, 1839. Rpt. La Vergne: Kessinger, 2009. Print.
- Sir Gowther*. Ed. Anne Laskaya and Eve Salisbury. Kalamazoo: Medieval Institute Publications, 1995. <<http://www.lib.rochester.edu/camelot/teams/gowthfrm.htm>>. Web. 23 Aug. 2011.
- The Quest of the Holy Grail*. Trans. P. M. Matarasso. London: Penguin, 1969. Print.
- Yorkshire Writers: Richard Rolle of Hampole and His Followers*, vol. II. Ed. Carl Hoartmann. London: Swan Sonnenschein, 1896. Print.

### 二次資料：

- Ackerman, Robert W. "Gawain's Shield: Penitential Doctrine in *Gawain and the Green Knight*." *Anglia* 76 (1958) : 254-265. Print.
- Allen, Valerie. "Sir Gawain: *Cowardyse* and the Fourth Pentad." *The Review of English Studies* n.s. 43 (1992) : 181-193. Print.
- Ariès, Philippe. *The Hour of Our Death*. Trans. Helen Weaver. Harmondsworth: Penguin, 1981. Print.
- Barron, W.R.J. *Trawthe and Treason: The Sin of Gawain Reconsidered*. Manchester: Manchester UP, 1980. Print.
- Beaty, Nancy Lee. *The Craft of Dying: A Study in the Literary Tradition of the ARS MORIENDI in England*. New Haven: Yale UP, 1970. Print.
- Benson, Larry D. *Art and Tradition in Sir Gawain and the Green Knight*. New Brunswick: Rutgers UP, 1965. Print.

- Boyle, Leonard E. "The Fourth Lateran Council and Manuals of Popular Theology." in *The Popular Literature of Medieval England*. Knoxville: U of Tennessee P, 1985. 30-43. Print.
- Burrow, J.A. "The Two Confession Scenes in *Sir Gawain and the Green Knight*." *Modern Philology* 57 (1959) : 73-79. Print.
- . *A Reading of Sir Gawain and the Green Knight*. London: Routledge, 1965. Print.
- Dean, Christopher. "The Temptations Scenes in *Sir Gawain and the Green Knight*." *Leeds Studies in English* 5 (1971) : 1-12. Print.
- Duclow, Donald F. "Dying Well: The Ars moriendi and the Dormition of the Virgin." in *Death and Dying in the Middle Ages*. Edelgard E. DuBruck and Barbara I. Gusick. Eds. New York: Peter Lang, 1999. 379-430. Print.
- Duffy, Eamon. *The Stripping of the Altars*, 2nd ed. New Haven: Yale UP, 2005. Print.
- Field, P.J.C. "A Rereading of *Sir Gawain and the Green Knight*." *Studies in Philology* 68:3 (1971) : 255-69. Print.
- Hills, David Farley. "Gawain's Fault in *Sir Gawain and the Green Knight*." *The Review of English Studies*, ns 54 (1963) : 124-31. Print.
- Hopkins, Andrea. *The Sinful Knights: A Study of Middle English Penitential Romance*. Oxford: Clarendon, 1990. Print.
- Howard, Donald R. *The Three Temptations: Medieval Man in Search of the World*. Princeton: Princeton UP, 1966. Print.
- Koskenniemi, Inna. *Repetitive Word Pairs in Old and Early Middle English Prose*. Turku: Turun Yliopisto, 1968. Print.
- Levy, Bernard S. "Gawain's Spiritual Journey: Imitatio Christi in *Sir Gawain and the Green Knight*." *Annuaire Mediaevale* 6 (1965) : 65-106. Print.
- Manning, Stephen. "A Psychological Interpretation of *Sir Gawain and the Green Knight*." *Criticism* 2 (1964) : 165-177; rpt. in *Critical Studies of Sir Gawain and the Green Knight*. Donald R. Howard and Christian Zacher. Eds. Notre Dame: U of Notre Dame P, 1968. 279-294. Print.
- Matsuda, Takami. "*Sir Gawain and the Green Knight* and St Patrick's Purgatory." *English Studies* 88 (2007) : 497-505. Print.
- Mills, David. "An Analysis of the Temptation Scenes in *Sir Gawain and the Green Knight*." *JEGP* 67 (1968) : 612-630. Print.
- Morgan, Gerald. "The Validity of Gawain's Confession in *Sir Gawain and the Green Knight*." *The Review of English Studies*, ns. 36 (1985) : 1-18. Print.
- O'Connor, Sister Mary Catharine. *The Art of Dying Well: The Development of the Ars moriendi*. New York: Columbia UP, 1942. Print.
- Putter, Ad. *Sir Gawain and the Green Knight and French Arthurian Romance*. Oxford: Clarendon, 1995. Print.
- . *An Introduction to the Gawain-Poet*. London: Longman, 1996. Print.
- Sanderlin, George. " 'Thagh I Were Burde Bryghtest'—GGK, 1283-1287," *The Chaucer*

*Review* 8 (1973): 60-4. Print.

Scattergood, V.J. ““Sir Gawain and the Green Knight” and the Sins of the Flesh.”

*Traditio* 35 (1981): 347-371. Print.

Swanson, R.N. *Religion and Devotion in Europe, c.1215-c.1515*. Cambridge: CUP, 1995.

Print.

木間瀬, 精三 『死の舞踏：西欧における死の表現』東京：中央公論, 1974.

(2015.1.22 受稿, 2015.3.4 受理)

## 〔抄 録〕

本稿では、*Sir Gawain and the Green Knight* の「誘惑の場面」が *Ars moriendi* において詳述される5番目の「悪魔の誘惑」と同一であることを論証しようと試みた。死を前にした Gawain は、寝台の上で奥方から誘惑を受ける。Gawain の置かれた状況は、*Ars moriendi* において誘惑をうける死を前にした者のそれである。そして死が翌日に迫った Gawain は奥方の誘惑に負け、緑の腰帯を受け取る。「生きたい」という気持ちが Gawain を駆り立てたのだ。この感情は5つ目の悪魔の誘惑が標的にしている「生への執着」である。さらに *Ars moriendi* が「悔い改め」と「痛悔」の重要性を訴えていることも、両者の「誘惑の場面」の同一性を論じる上で看過することはできない。奥方の誘惑に屈したことで、Gawain は犯してしまった罪を「悔い改め」そして「痛悔」している。*Sir Gawain and the Green Knight* と *Ars moriendi* に通底する悔悛の重要性という主題は、両者が同じ死生観を共有していることを示す何よりの証拠である。